2025年4月12日渋沢栄一研究会。テーマ「大戦を避ける」発表者（問題提起者）：藤村峯一さん。ガイダンスは研究会座長の濱名均

・渋沢栄一との関連；①栄一の「民間外交」にあります。明治35年から昭和2年（1902年～1927年)までの間に、当時の通信、交通状況の中でも4人の米国大統領との会見を成している。驚異的な「先人としての努力とスケールの大きい国際感覚」と言える。第9号テーマ「民間外交」とします。

・②「なぜ大戦を避けられなかったのか？」については、渋沢栄一が「論語と算盤現代語訳」第9章「教育と情誼」で苦言を呈している箇所がある。

　即ち、学生は自分の才能の有無や、適不適もわきまえずに、『あいつも俺も同じ人間じゃないか。あいつと同じ教育を受けた以上、あいつがやれることくらい俺にもできるさ』。(p203)

・栄一の杞憂は、③1937年の盧溝橋事件（日中戦争への突入の契機）に於ける、陸軍の武藤章（当時時の作戦課長）と石原莞爾(作戦参謀の親玉)との意見相違と(人間としての)確執に見ることができる。

テーマをポイント3つに分けて考える（引き続いてのガイダンス）

- 大戦に至る経緯、①ペリー来航以来の明治政府による富国強兵策と日本を取り巻く世界情勢（藤村さん作成の年表）。

②世界的な植民地政策や日本からの「海外への移民政策」などを勘案すると、満州への開拓民の移住や国造りの幻想があった。石原莞爾の王道楽土や五族協和の思想と理想。

- 直前ながら、ギリギリの戦争回避（大戦回避）はできなかったのか？

①ハルノート(1941年11月26日、正式交渉に提示された交渉文書)(戦争を避ける為に4月から始めていた日米交渉の最終段階のもの)への対応。

②東條英樹（当時の首相兼外務大臣他）の非常時のリーダーとしての資質を再検証。

- ヤルタ会談(1945年2月4日～11日）と、東京大空襲（3月10日未明）による10万人の死者を出した夜間空襲の間の1か月間の空白を、どの様に「後世の我々は解釈しなければならないのか？」

先の大戦の民間人や軍人の死者数の半数前後はヤルタ会談以降である。日本国のリーダー層は思考停止状態の半年間ではなかったのか。